



北方民族博物館だより

No.74



H17.23 ^{さや}鞘付ナイフ 全長 28.6cm
サハ（ヤクート）
ロシア・サハ共和国ヤクーツク市シールダーフ地域
シャドリシ＝カブリール作

サハの猟師用のナイフ。鞘は革で、洋銀で補強・装飾されている。
ナイフの柄の部分は白樺のこぶ製。鞘に付けられている細長い金属
片は火打ち金である。

- 1 表紙 鞘付ナイフ
- 2 写真展 遊牧と鷹狩りの高原に生きる
- 3 特別展 千島列島に生きる－アイヌと日露・交流の記憶
- 5 講演会 千島・北海道交流史
- 6 INFORMATION



写真展

遊牧と鷹狩りの高原に生きる ～西モンゴル・カザフ写真展～

2009.6.2-6.25

北方民族博物館では、これまでも何度か北方諸民族の文化や現代の生活、北方の自然環境などを紹介する写真展をおこなってきましたが、今回初めてカザフを取り上げました。

カザフは、ヒツジ、ヤギ、ウマ、ラクダ、ウシといった5種類の家畜の遊牧を伝統的な生業としてきたテュルク（トルコ）系民族です。大多数は中央アジアのカザフスタン共和国に住んでいますが、近隣の中華人民共和国、ウズベキスタン共和国などのほか、一部がモンゴル国にも暮らしています。

本写真展では、「NPO法人北方アジア文化交流センター・しゃがぁ」所蔵の写真パネル40枚により、多くのカザフが暮らすモンゴル西部・バヤンウルギー県の雄大な風景やカザフの生き生きとした日常生活を紹介しました。

まず最初に、自然景観を撮影した写真を展示しました。バヤンウルギー県は全体的に乾燥が激しい地域ですが、一方で氷河や万年雪をたたえる高山が多く、湖や大きな川もたくさんあります。乾燥した大地と豊かな水流という対照的な要素が、独特の景観を作っているのです。本コーナーには、こうした要素が絡み合って作り上げた多様な風景写真を集めました。

次に、カザフの伝統文化である鷹狩りを紹介するコーナーを設けました。飼ひ馴らした猛禽類を放ち、獣や鳥などの獲物を捕らせる狩猟方法を「鷹狩り」と呼びます。モンゴル国のカザフは、今でもイヌワシを使った鷹狩りを伝統的な生業活動として受け継いでいるのです。イヌワシを携え、岩山をウマで移動しながら獲物を探す鷹狩りの様子、イヌワシが獲物のヤマネコに襲いかかる瞬間など、鷹狩りのさまざまな場面が捉えられています。

三番目のコーナーは、カザフの日常をテーマとしました。夏の間利用される「ウイ」と呼ばれる移動式住居、家畜の世話の様子、燃料となる家畜の糞運び、馬肉で作られたソーセージなど、現在の生活が写し出されています。同じモンゴル国に住むモンゴル系民族の生活と似ているようにも思えますが、違う部分も垣間見えます。

最後のコーナーは、衣類や装飾品、それを作る女性の様子を中心にまとめました。鮮やかな青い衣装をまとったヒゲの老人、襟や裾に色とりどりの刺繍が施された衣装で着飾った人びと、刺繍で一杯の壁掛けや敷物で覆われた家の中の様子など、カザフの人びとが好む華やかな色彩で溢れた写真です。

その他、在野のドンブラ（弦楽器）奏者クグルシン氏を

紹介する写真の横にはモニターを置き、クグルシン氏とその子どもたちによるカザフ音楽の歌と演奏の様子を音と映像でも紹介しました。また、子ども用の衣服や壁掛け、敷物、手さげ袋、お守り、弦楽器など、少数ながら実物資料を展示するコーナーも設けました。



各パネルには、写真を撮影した西村幹也氏（NPO法人北方アジア文化交流センター・しゃがぁ理事長）によるユニークな解説文も付けられました。約1ヶ月の会期中に1792名の入場者があり、日本では目にすることの少ない西モンゴルの自然やカザフ文化についてじっくりと見入る姿がみられました。

写真展関連事業

「アサック」で遊ぼう ギャラリートーク

2009.6.7

写真展の関連事業として、西村幹也氏（NPO法人北方アジア文化交流センター・しゃがぁ理事長）による二つの催しをおこないました。

午前には「みんな夢中！遊牧民のゲーム「アサック」で遊ぼう」をおこないました。「アサック」とは、カザフ語でヒツジのくるぶしの骨のことです。展示をご覧になった方に参加していただき、アサックを駒やサイコロのように使って双六に似たゲームをしました。

午後には、「写真展ギャラリー・トーク」をおこないました。まず講堂でスライドなどをふんだんに使いながら、バヤンウルギー県の風景、カザフの生活など、モンゴルでカザフの人びとが置かれている状況や撮影の際のこぼれ話を中心にお話いただきました。

その後は、写真展の会場に移り、いくつかのパネルを取り上げながら、それぞれの詳しい解説をしていただきました。

講師に対して熱心な質問が出るなど、参加者のモンゴル国やカザフに対する関心は一段と高まった様子でした。

（学芸グループ 中田 篤）

第24回特別展 環北太平洋の文化Ⅳ

千島列島に生きる —アイヌと日露・交流の記憶

2009.7.18－10.18

特別展「環北太平洋の文化」シリーズの最終回では、千島列島に注目しました。

千島列島海域は、サケ類やタラ、ラッコ、オットセイなどの資源に恵まれており、古くは先史時代の頃から人びとが行き交う場所でした。しかし、時代を問わず千島列島でのくらしは厳しく、ここで生きるためには水産資源を得るための技術を身につけ、船を巧みに操り、島外との交流を通じて生活の安定を図る必要がありました。

本展では、先史時代から現代まで、千島列島を舞台にした人びとのくらしや交流の歴史を紹介しました。以下に展示概要を報告します。

はじめに

千島列島は、地理的に北千島、中部千島、南千島に区分されます。日本では、北方四島に対応する南千島の島々を除いてはカタカナで記されるのが一般的です。また、中部千島以北の島は、読み方、表記法ともに一様ではありません。

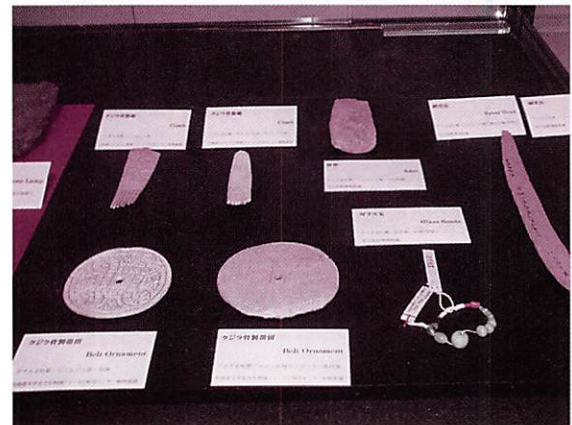
本展では、便宜的に各島を【表】のように記しました。

北 千 島	シュムシュ島(占守島)	
	アライト島(阿頼度島)	
	パラムシル島(幌筈島)	
中部千島	マカンル島(磨勘留島)	
	オンネコタン島(温禰古丹島)	
	ハルムコタン島(春牟古丹島)	
	エカルマ島(越湯磨島)	
	シャシコタン島(捨子古丹島)	
	ムシル列岩(牟知列岩)	
	ライコケ島(雷公計島)	
	マツワ島(松輪島)	
	ラショウ島(羅処和島)	
	ウシシル島(宇志知島)	
	ケトイ島(計吐夷島)	
	シムシル島(新知島)	
	プロトン島(武魯頓島)	
	チリホイ島(知理保以島)	
	ウルップ島(得撫島)	
南 千 島 (北方領土)	択捉島(エトロフ島)	
	国後島(クナシリ島)	
	色丹島(シコタン島)	
	歯舞群島 (ハボマイ群島)	海馬島(カイバ島)
		多楽島(タラク島)
		志発島(シボツ島)
		勇留島(ユリ島)
		秋勇留島(アキユリ島)
		水晶島(スイショウ島)
		貝殻島(カイガラ島)

【千島列島の先史文化】

千島列島にはじめて人が足を踏み入れたのは、後期旧石器文化の約2万年前から1万年前の頃とされます。北海道から北上してきた旧石器文化は、国後島や択捉島にまで達していました。続く縄文文化（約8000年前～2800年前）は南千島にとどまり、続縄文文化（紀元前1世紀頃～8世紀頃）は中部千島まで、サハリンや北海道オホーツク海沿岸のオホーツク文化（5世紀頃～10世紀頃）は北千島にまで生活圏を広げました。

その後、続縄文文化の後継と考えられる擦文文化（7世紀頃～13世紀頃）は南千島だけを生活圏としますが、その後のアイヌ文化になると再び中部千島以北からカムチャツカ半島にまで生活圏を広げました。



千島列島出土遺物

【アイヌと海～生業と交易】

江戸時代の頃、千島列島には、南千島に北海道アイヌが、中部千島以北に千島アイヌが生活していました。彼らは北海道やサハリンのアイヌと同様に、狩猟や漁労、採集などを組み合わせて生活していました。

海獣狩猟や漁労によって得たアザラシ類やサケ類は自ら消費するとともに、交易品としても利用しました。特にラッコやアザラシ類の毛皮、鷺羽などは交易品として珍重され、本州に流通しました。

その対価としてアイヌには本州産の漆器類や鉄鍋、米、煙草などがもたらされ、これらの製品が千島列島全域に広がっていきました。

【ロシアの南進・日本の北進】

江戸幕府ではサケ・マスなどの海産物や貴重なラッコの毛皮が、蝦夷地（北海道の旧称）の東部に住むアイヌからもたらされていることは知られていました。しかし、当時北海道東部や千島列島に赴いた和人は少なく、詳細な記録も多くはありません。

18世紀末、ロシアが千島列島を南下して蝦夷地に向かっていることを知った江戸幕府は、南千島に役人を派遣しました。彼らは北海道アイヌや千島アイヌからロシアの動向や島々の地理を聞き取り、その情報をもとに、択捉島以南を国土として役人を常駐させロシアの南下に備えました。

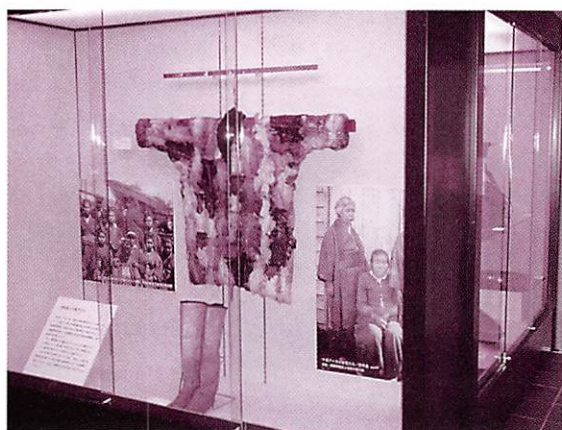
安政元（1855）年、日露の間で通好条約が結ばれ、択捉島以南が日本領、ウルップ島以北がロシア領となり、樺太は日露雑居の地と決まりました。これにより北海道アイヌと千島アイヌの交流は途絶え、北海道アイヌの日本化、千島アイヌのロシア化が進みました。

【明治時代の千島アイヌ】

明治8（1875）年に、樺太千島交換条約によって樺太（サハリン）がロシア領、千島列島全域が日本領となりました。北海道の開拓と行政を担当した開拓使は、数回にわたって千島列島を巡航し、自然環境や先住民の動向を調査し、民族資料を収集しました。

また、開拓使はロシア化した北千島在住の千島アイヌに、日本国民となって南千島へ移住するか、ロシア国民となって千島列島を退去するかを決めるよう求めました。千島アイヌが返答しなかったため、明治17（1884）年、開拓使は千島アイヌを色丹島へ強制移住させました。これにより彼らはなじみのない環境での暮らしを強いられることとなりました。

明治32（1899）年、民族学者の鳥居龍蔵は、色丹島で約1ヶ月にわたって千島アイヌに関する調査を行いました。鳥居の調査は、千島アイヌが北千島から色丹島へ移住させられて15年後のことですが、千島アイヌの古老達からは、北千島で生活していた頃の衣食住や生業、精神文化など、多くの伝統文化を聞き取り、また多くの貴重な民族資料を収集しました。



鳥羽衣（複製）

【北洋漁業の盛況】

千島アイヌが北千島から色丹島へ移された一方、日本の漁業会社が北千島周辺海域の豊かな漁場を求めて進出してきました。

大正末頃（1920年代後半）、流し網を用いた母船式サケ・マス漁によって千島列島周辺海域での漁業は発展し、島々には工場や倉庫などの施設が増え、多くの出稼ぎ労働者で賑わいました。

【終戦と北方領土問題】

昭和20（1945）年、日本は第二次世界大戦で敗戦しました。戦勝国側のソ連は、その約半月後に、南千島に侵入し、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島を占領しました。当時の全島民約1万7千人は、その後の約2年間をソ連の支配下でくらししました。ソ連による強制労働や物資の強奪などを避けて島から逃げ出した人々は、その航海の途中で命を落とすこともあったといわれています。昭和22（1947）年、島に残っていた島民は、強制的に船に乗せられ、樺太経由で日本に送還されました。

北方四島の返還運動は終戦直後から始まりました。昭和21（1946）年に北海道附属島嶼復帰懇請委員会が組織され、その後、領土返還を求める多くの団体が組織され今にいたっています。

昭和26（1951）年、サンフランシスコ講和会議が開かれ、日本はアメリカをはじめとする国々との間で平和条約に調印しましたが、この時ソ連は平和条約に調印しませんでした。昭和31（1956）年の日ソ共同宣言の発表に伴い、日ソ、日露の関係は改善の方向に向かい、歯舞群島海域での漁業協定や、元島民の墓参、ビザなし交流など、友好的な関係が築かれてきました。

しかし、領土問題は未解決のまま残されており、互いが納得できる解決策が望まれています。

現在、千島列島に関する研究は日露双方とも活発であるとはいえません。そのため当地にまつわる資料も少なく、本展の構成には苦心しました。以下の機関、個人のご協力がなければならなかったと実感しています。ここに謹んでお礼申しあげます。

国立民族学博物館、市立函館博物館、函館市北方民族資料館、北海道大学附属図書館、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、根室市歴史と自然の資料館、東京大学総合研究博物館、北海道総務部北方領土対策本部、NPO法人北の海の動物センター、（株）HBCフレックス、川上淳氏（札幌大学）、手塚薫氏（北海学園大学）、大矢京右氏（市立函館博物館学芸員）、長澤政之氏（小平町教育委員会）

（学芸グループ 角 達之助）

特別展関連講演会

千島・北海道交流史

2009.7.18

特別展初日にはお二人の講師をお招きし、文献史学と考古学から見た千島列島・北海道史についてお話いただきました。以下にその概要を紹介いたします。

「道東・千島におけるアイヌの生活世界の変容 ー日本とロシアの登場がもたらしたものー」

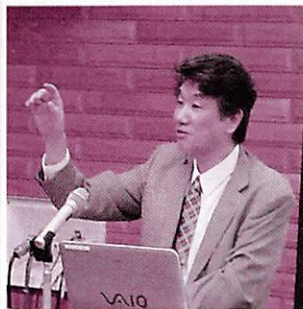
講師 菊池 勇夫氏（宮城学院女子大学）

平安時代以降江戸時代に至るまで、千島列島は北海道やサハリンとともに「蝦夷が千島」と一括して記録され、知られてきた。17世紀初頭から18世紀初頭までは、アイヌによって松前藩にもたらされるラッコ皮や鷺羽が「ラッコ島」産のものであるという記録があり、その名が国内に知れわたるようになる。しかしこの頃の「ラッコ島」は特定の島（ウルップ島）というよりは、近辺の島々の総称として使用されていた。

18世紀後半、ロシアが千島列島沿いに南下し、北海道へ近づいてきていることが江戸幕府の知るところとなると、「蝦夷と「カムサスカ」との間に千島とて島々あり」などの記録が見られるようになり、蝦夷（北海道）と千島列島を分け、さらに千島列島が個々の島から成ると認識するようになる。

寛政11（1799）年、幕府の命により択捉島、ウルップ島開発に着手した近藤重蔵は、ツキノエやイコトイなど北海道アイヌから聞き取った情報を基に、ウルップ島までを領土とした。しかし、この地は不毛なためロシアの国境との緩衝地帯とし、シムシル島以北がロシア領で、この範囲を「千島」とした。ただし、千島列島の「範囲」は、国後島からシムシュ島までとする他の記録もみられ、近世日本の千島列島の範囲は一樣ではなかった。

19世紀初頭、ロシア人がウルップ島に滞在し、ラッコ猟に従事していることが知れると、幕府は彼らを兵糧攻めにすれば自主的に退去すると考え、彼らと連絡をとる可能性があるアイヌのウルップ島渡海を禁止した。幕府によるこの措置は、北海道アイヌと千島アイヌの交易を制限することにもなり、以後ウルップ島より北に拠点を置く千島アイヌはロシア化してゆくこととなった。



「千島列島へ人はいかに居住したか」

講師 手塚 薫（北海学園大学）

2000年以降、千島列島における先史人類学調査（IKIP）や国際千島調査（KBP）に参加し、千島列島のほぼ全域で発掘調査を行った。この調査を通じて、縄文文化以降アイヌ文化における遺構や遺物を発見し、各文化期の居住範囲を知ることが出来た。



各文化期の居住時期は、土層から採取した炭化物の分析を通じて特定したが、13世紀から17世紀の間は、炭化物が発見できず、人の活動を確認することができなかった。したがって、この期間居住の断絶があったと考えられる。居住断絶の理由としては、大津波や火山噴火などの自然災害、あるいは寒冷化現象が考えられている。

実際、土中に残された火山灰の分析を通じて、この期間に地震が起これ、それに連動して大津波が発生していることが地質学者や地震学者によって報告されている。また珪藻分析によって、津波が内陸の奥深くまで浸食したこと、海面が低下し気候が寒冷化したことが明らかとなっており、オホーツク文化の居住以後、アイヌの居住に至る13世紀から17世紀の間に千島列島で居住することは困難を伴ったと予想される。

このように自然環境の変動が、島での居住を左右する一方、人の資源利用や土地利用のあり方が居住を困難にする場合がある。島は、大陸と異なり陸の資源利用が制限されるため、陸の資源に依存しすぎると資源の枯渇を招き、徐々に居住困難となってくる。海の資源を利用できる技術と季節的な島の移動を繰り返せる航海術が備わっていれば、陸の資源への依存度は低くなり、生存の可能性は高まる。千島アイヌは生存のために長期間の長距離移動を繰り返していたと考えられる。

千島列島におけるアイヌ文化の拡散と適応は、未解明の部分が多い。今後、自然環境の変動とアイヌの資源・土地利用の実態を明らかにすることの両面から検討してゆく必要がある。

（学芸グループ 角 達之助）



Arctic (フィンランド) で



サハで発行された当館マンモス制作の記録より

当館館長の谷本一之先生が、平成21年7月19日にご逝去されました。

谷本先生は平成8年に財団法人北方文化振興協会理事、平成15年4月に当館第三代館長に就任されました。

在任中は、当館と他機関との学術交流協定締結に尽力されました。この協定をもとにサハ共和国国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館の協力により、原寸大復元マンモスの復元製作を実施しました。

ここに謹んで哀悼の意を表し、先生のご冥福をお祈りいたします。

第24回北方民族文化シンポジウム 現代社会と先住民文化 1

～観光、芸術から考える～

日時 平成21年10月17日〔土〕、
18日〔日〕 午前9時30分～

会場 オホーツク・文化交流センター

エコセンター2000 大会議室

発表者

イーサン・ペティクルー

(アラスカ先住民文化センター)

リーシャ・デビス

(キャンベルリバー博物館)

秋辺日出男

(世界先住民ネットワーク AINU)

村木美幸 (財団法人アイヌ民族博物館)

西村幹也 (NPO法人しゃがあ理事長)

窪田幸子 (神戸大学)

深山直子

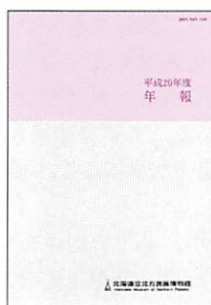
(日本学術振興会/お茶の水女子大学)

渡部 裕 (北海道立北方民族博物館)

INFORMATION

印刷物発行

北方民族博物館年報平成20年度版を発行しました。



第24回特別展『千島列島に生きる
—アイヌと日露・交流の記憶—』の
展示図録を発行しました。



行事報告

◆6月20日〔土〕に、はくぶつかんクラブ「フェルトでつくるモンゴル風コースター」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。

◆6月21日〔日〕に、学芸員講座「シベリアのトナカイ遊牧民：現代の生活と地球温暖化の影響」(講師：中田篤学芸員)を開催しました。

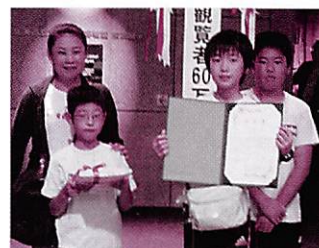
◆7月25日〔土〕、8月8日〔土〕に、はくぶつかんクラブ「土器づくり」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。



◆8月1日〔土〕に、学芸員講座「草木ぞめ～昔のちえにまなぼう」(講師：齋藤玲子主任学芸員)を開催しました。

常設展示観覧者が60万人に

当館は平成3年2月10日に開館しましたが、7月31日に常設展示観覧者数が60万人に達しました。60万人目となったのは、松山市の小学5年生前田哲郎君でした。



北方民族博物館だより

No. 74

平成21(2009)年9月30日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

財団法人北方文化振興協会